HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | Understanding How Media Exposure Influences Old Adults Travelers ’ Perceived Risk and Travel Intention During the COVID-19 Pandemic [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review] |
| Author(s) | 高, 嘉儀 |
| Citation | 北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第15616号 |
| Issue Date | 2023-09-25 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/90899 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | theses (doctoral - abstract and summary of review) |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | Jiayi_Gao_review.pdf (審査の要旨) |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

国際広報メディア：博士（国際広報メディア）　　氏名：高　嘉　儀

審査委員　主査　准教授　張　ジュヒョク
副査　教授　辻　本　篤
副査　特任教授　伊　藤　直　哉

学位論文題名
Understanding How Media Exposure Influences Old Adults Travelers' Perceived Risk and Travel Intention During the COVID-19 Pandemic
(COVID-19 パンデミック時のメディア報道が高齢者旅行者のリスク認知と旅行意図に与える影響についての考察)

COVID-19 による世界的規模のパンデミックが引き起こした移動制限により、旅行産業全体はグローバルレベルで深刻な打撃を受けることになった。最初の感染者を見出した中国では、いち早く社会的・政治的感染リスクを最大限向上させ、急激な経済的停滞を招くと同時に、国民の健康リスクも急速に悪化の一途をたどっていた。このような状況下において、観光のような人流の高い行動は、特にリスクの高い行動として戒められていた。本研究はこのような社会状況に鑑み、世界的パンデミックに関する多様なメディア情報は、一般的消費者を含む観光行動者にどのような影響関係を与えていたのか、さらに、メディア情報はこのような危機的状況に対する感覚をどのように鋭敏化させ、公衆衛生的対応準備を促進させ、また再び観光産業の復活をどのようにもたらすことが可能なのかという研究課題を検討している。具体的には先行研究を参考に、メディア情報発信、認知的・感情的リスク認知、情報自己効力感（self-efficacy）、予防行動、旅行意図等の構築概念や変数を準備し、パンデミック初期におけるメディア情報とリスク認知、予防行動、旅行意図等の関係性を検討している。本研究では TPB 理論（theory of planned behaviour）や PMT 理論（Protection Motivation Theory）を基に研究モデルが構築され、COVID-19 初期のパンデミック状況において、多様なメディア情報が、リスク認知プロセスを経て、どのように予備行動や旅行意図に影響を与えているかを検証している。データは、2020 年 3 月、オンラインとスノーボールサンプリングにより 1,523 件のサンプルが収集され、男女及び若者層と高齢者層の比較研究を行っている。

本研究の検証結果は、パンデミック初期段階に顕著であった高認知的リスクに支配された消費者行動様式を示している。メディア情報と情報自己効力感の関係性はリスク認知拡散の主要な役割を演じている一方、メディア情報理解能力の高い人々は、リスク情報を過剰に訴える情報を効果的に選別し、制御している様子

が推定される。さらに、本モデル結果は旅行意図に関する強い否定と、公衆衛生上の予防的手段を積極的に行う強い意志を表している。この傾向は、若者層より高齢者層に強く観察されるが、高齢者自身、パンデミック期間を通してインターネットを中心とする情報アクセス手段が制限されており、情報リテラシーや情報アクセス手段の向上必要性が本研究では指摘されている。その一方で、本研究最大の限界は、高齢者データの質の向上であるといえる。スノーボールサンプリングの限界も含め、良質な高齢者データの収集方法は今後の大きな課題である。

以上のような博士論文内容に関して、本審査委員会では以下のような質疑応答が行われている。最初に、各種メディア情報利用の測定方法に関しての質問が行われた。第二に、サンプル対象が中国全土ではなく吉林省に絞られた理由が問われた。また認知的リスク（Cognitive Risk）が因子として成立しなかった理由に関して、また最後に感情的リスク（Affective Risk）のパスに有意が出なかった理由に関しての質問がなされた。一つ一つの質問に対して、筆者からの詳細な解説と適切な議論が行われ、審査委員会一同は議論内容に十分に納得したことを記しておく。

以上の審査結果をもとに，本論文に対して審査委員会は慎重な議論と検討を行った結果，本研究の学問的意義、本論考の方法論的信頼性と妥当性は十分であり、学問的貢献、実務的貢献においてもその意義や波及効果は十二分に高いものと判断した。そこで，本審査委員会は，本研究を北海道大学博士（国際広報メディア）に相応しい学術論文であることを全会一致でここに認め，その結果をここに報告するものであります。宜しくご検討のほど、お願い申し上げます。